

わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように

今日は復活前主日です。毎年復活前主日はイエス様がエルサレムの城にお入りになったことと苦難を記念します。普段であれば、シュロの十字架を祝福し、苦難の福音をご一緒に読み、イエス様の苦難を思い出す礼拝を捧げるはずでしょう。けれども、教会で信徒たちがともに礼拝を捧げることができない状況が続き、ただただ残念でなりません。

けれども、ともに礼拝を捧げることができないままに迎えたこの復活前主日が、特別な恵みになりうることもあります。それは、コロナ禍がすべての人にとっての苦難であるゆえ、イエス様の苦難の意味をもっと深く理解することができ、私たちが苦難の中でどのように生きていけばいいのかを深く考えるきっかけにもなるからです。

それでは、イエス様はご自分に迫ってきた苦難をどのようにお受け止めになったのでしょうか。そして弟子たちはこのような苦難にどのように向き合ったのでしょうか。イエス様は苦難を堂々と受け入れたのでしょうか。そうではありませんね。イエス様も悩み苦しみました。聖書にはその様子が「イエスはひどく恐れてもだえ始めた」（14:33）と記されており、イエス様は弟子たちに「わたしは死ぬばかりに悲しい」（14:34）とおっしゃったほどでした。そしてイエス様は神様に「できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るように」（14:35）と切にお祈りなさいました。

このようなイエス様の姿に、「頼りない」とがっかりする方がいらっしゃるかもしれません。確かにイエス様は試練に堂々と立ち向かったり、敵を退けたりする英雄的な姿ではありませんでした。しかしイエス様はこのように悩みながら、葛藤しながら、暮らして来られた方であるから、弱い私たちの心も充分理解なさることができます。イエス様がこの世にいらっしゃったわけも人間を理解して、人間と共にするためでした。イエス様は、弱く、悩みながら生きてきましたが、苦難と復活を通して救いの光を確かに見せてくださいました。それがまさに「信仰の神秘」です。今日ご一緒に読んだ苦難の福音は、その「信仰の神秘」が他でもなく「神様のみ旨に従う従順」を通して成し遂げられたことを示しています。したがって、イエス様の復活は「従順による勝利」とも言えるでしょう。今日ご一緒に読んだフィリピ書はそれをこのように教えてくれています。

「人間の姿で現れて、… 十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを

高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。」(フィリピ2:8-9)

イエス様は苦難が迫ってくると何よりも先ずお祈りをなさいました。そして弟子たちにも「目を覚ましていなさい」と言われました。けれども、弟子たちは皆眠ってしまいました。イエス様は祈りながら三度も戻って弟子たちをご覧になりましたが、弟子たちは眠っていました。従順とはほど遠かったのです。その時、イエス様はどのようなお気持ちになったでしょうか。失望なさいたでしょうかし、独りで荒波の前に立っているようなお気持ちになられたでしょうか。イエス様は人間の身をもってこの世にいらっしゃったのですから孤独から抜け出すことは難しかったのでしょうか。

人間は愛する人がそばにいても孤独を感じます。ある詩人は、「私は、あなたがそばにいてもあなたが慕わしい」と嘆きました。孤独から抜け出すために身もだえしますが、孤独から抜け出すのは簡単ではありません。孤独は冷たい真冬の風のように骨の髄まで染み込んで来て、人間をどうすることもできないようにしてしまいます。孤独は、もしかしたら、エデンの園から離れた人間の運命であるのかもしれませんが。けれども、その孤独は恵みになることもあります。孤独は、神様に会える大切な機会でもあるからです。一日中忙しく過ごしている人は孤独を感じるほどの余裕もありません。けれども、いつの間にか取り留めのない虚しさに崩れてしまい、途方に暮れることもあります。普段孤独と向き合う方法を分かっていたからです。孤独の時間に、何より必要なのは祈りです。祈りを通して、私たちは神様に会えます。そして祈りを通して私たちは孤独と孤立から自由になることができます。

最近私たちの周りには、このコロナの状況が家族関係を深めてくれたと言う人もいますが、葛藤と分裂、試練と苦しみをもたらした例の方がさらに多いです。またコロナウイルス以上に絶望と挫折、虚無と無気力という精神的なウイルスもこの世の中に蔓延しています。口先では神様を認めていながらも、神様とは関係ない姿で生きていく人も多いです。それゆえ、祈りがさらに切実です。祈りは、私たちを神様と緊密に繋がらせます。祈りを通して、神様のうちに繋がる人間関係がお互いの成長と喜びをもたらしてくれます。そして祈りは、絶望と挫折、虚無と無気力、試練と苦しみから私たちを守ってくれますし、私たちを希望の世界に導いてくれます。使徒パウロは、私たちが決して忘れてはならない信仰をこのように教えてくれました。

「神は…あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。」(1コリント10:13)

イエス様もこのような信仰があったからこそ、苦しみの時が過ぎ去ることを切に祈りながらも、最終的には「わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」とお

祈りなされたということを忘れてはいけません。苦難の時間に何より重要なことは、神様のみ手を取り、神様に頼ることです。

それでは、弟子たちの姿を見てみましょう。弟子たちも敏感に、イエス様がゲセマネでお祈りをなさる時、何か大きな危機と試練が近づいてくることを感じ取っていたでしょう。イエス様が「目を覚ましていなさい」(14:34)とおっしゃった時緊張もしたでしょう。けれども彼らは眠ってしまいました。聖書にはその様子が、「ひどく眠かったのである」と記されています。また、このような状況にどうすべきか、人間としての限界も感じていました。聖書には「彼らは、…どう言えばよいのか、分からなかった」とも記されています。私は、苦難の福音を読み返して、イエス様がゲセマネでお祈りなされた時から復活なされた時まで、ペテロがイエス様を否認したこと以外の弟子たちの声が一言も記されていないことを見出して改めて驚きました。本当に弟子たちは何をどう言えばいいのか、分からなかったようです。けれども、弟子たちがイエス様とともに祈っていたのであれば、聖霊は「どう言えばよいのか」と教えてくれていたのではないのでしょうか。聖書にはこのように記されています。

「何を言おうかと取り越し苦労をしてはならない。そのときには、教えられることを話せばよい。実は、話すのはあなたがたではなく、聖霊なのだ。」(マルコ 13:11)。

今日の礼拝に先立ってシュロの十字架を祝福しました。そして、もうすぐ皆さんのご家庭にお送りします。このシュロの十字架は、イエス様がエルサレムの城にお入りになった時、多くの人々がシュロの枝を振りながら迎え入れたことを記憶するためのものです。その時、人々は熱い心をもってイエス様を迎え入れました。しかし、しばらくしてから心が変わりました。群衆は祭司長たちの扇動によって「イエスを十字架につけろ」と叫びました。人々の心はこのように容易く変わります。シュロの十字架を作って配るのは、このように心が変わったことを忘れないようにという誡めの目的もあります。このシュロの十字架を皆さんの部屋の十字架の上にかける時、皆さんの心の中にもこのシュロの十字架をかけておいてください。そして変わらない心をもって神様に従いながら生きていきましょう。また、私たちの人生を神様に委ねながら、祈りましょう。そうすれば、コロナ禍のように私たちを萎縮させ、恐れをもたらすすべての災いから自由になれる道を見つけることができるでしょう。私たちの人生は、神様のみ旨に従う時、自由になります。今日ご一緒に呼んだイザヤ書には私たちの信仰をさらに固めるためにこのように宣べ伝えています。

「地の果てのすべての人々よ、わたしを仰いで、救いを得よ。わたしは神、ほかにはいない。」(イザヤ 45:22)

この一週、イエス様の苦難の意味を思い出し、祈りの生活を通して神様に頼り、新たに自

由を得られますように心からお祈りいたします。